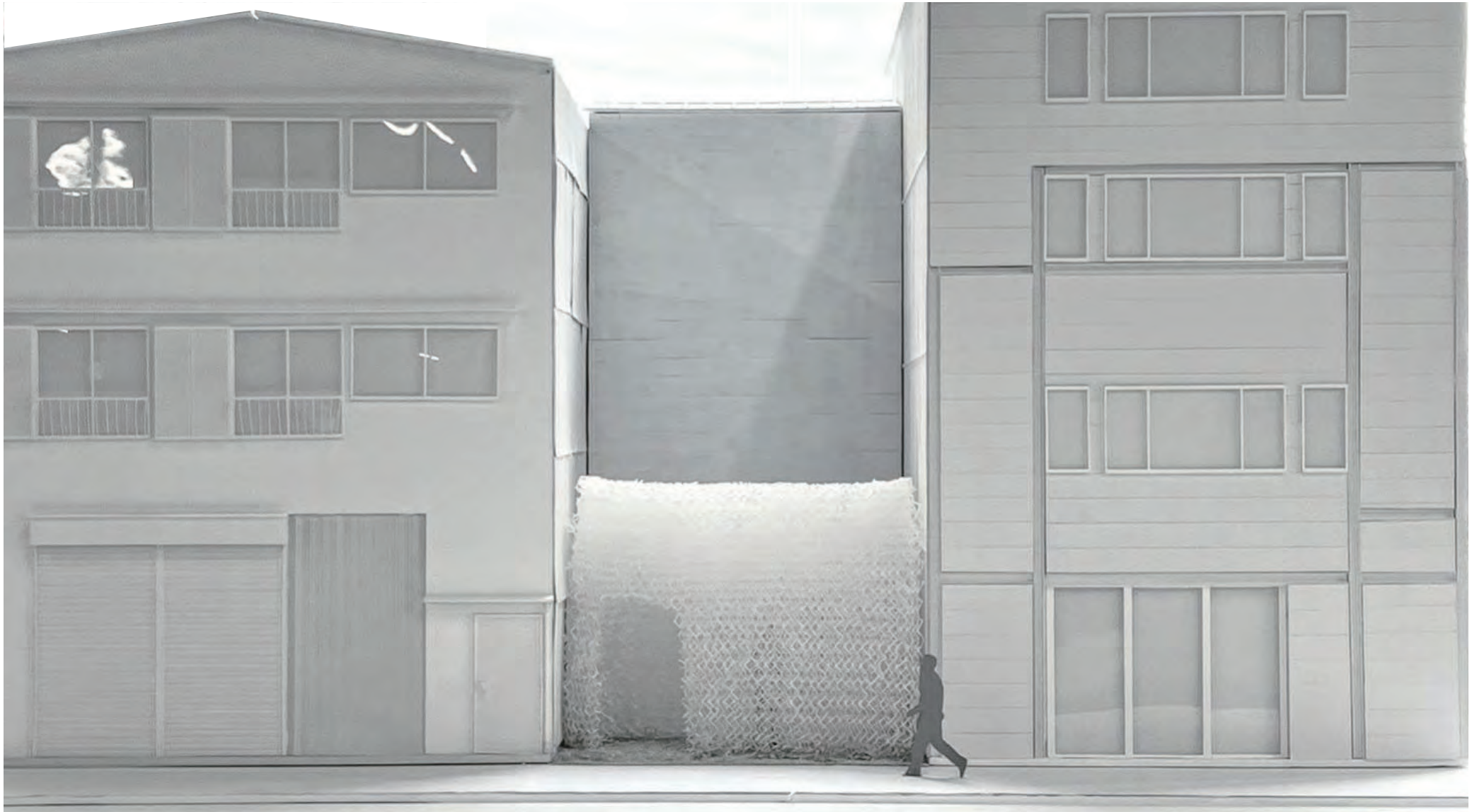


雲 [kúmo]

重さとは、質量であり、さらに言うなら存在だ。
軽さを求める事とは、存在の曖昧さを求める行為とも思える。雲や幽霊のようなにあるのか無いのかも分からない曖昧さ。
質量のある都市（日常）に対して、質量のない空地（非日常）。それらを質量の曖昧な存在で繋ぐ。

日常 - 非日常の繋ぎの研究
そして設計

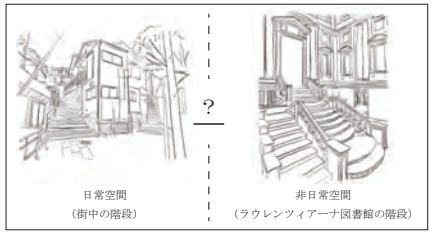
篠原一男もクリスチャン・ノルベルグ＝シュルツも誰も彼も非日常の性質について着目して、日常に対してどのように繋がればいいかについては無頓着だ。
故に、街中は日常に溢れてしまった。心を動かし感動させる、そんな支配的なまでの非日常な空間を喪失した街は、退屈そのものである。
この研究を通した設計で、街中の日常に同化してしまった非日常を取り戻す。

日常		非日常
ロマン的	?	宇宙的
機能空間		象徴空間
原っぱ		遊園地
ケ		ハレ

日常 - 非日常の繋ぎの研究、そして設計

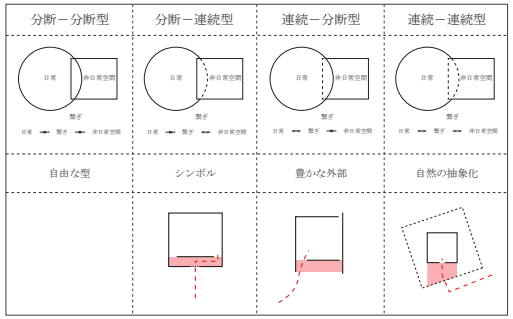
日常の中で我々は、見たいように見て、感じたいように感じている。それは自由で優しくとても良い事のように思われる。実際に悪いものではない。しかしそんな自由にあふれた世界では、我々の心を強制的に動かして１つの感情に収束させるような支配的で強烈な体験は存在しない。つまり、感動することのない世界である。
非日常の空間は、そんな退屈な世界を打ち破る。

研究



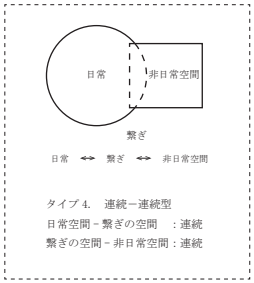
日常に非日常をつくる。そこでは、どのように非日常をつくるのかと同等に、どのように日常と非日常を繋げるかが大切である。
本研究は、日常と非日常の繋ぎに着目して繋ぎの手法を導き出す。

結論



応用

繋ぎの空間の型



タイプ 4.　連続－連続型
日常空間 - 繋ぎの空間　：連続
繋ぎの空間 - 非日常空間：連続

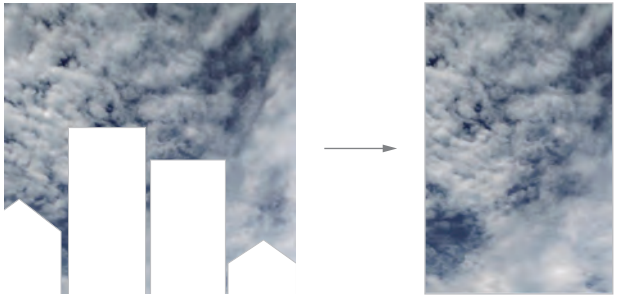
論文にて説明

本提案では、周辺環境や元の空間（空地）には手を加えず繋ぎの空間のみで空間の非日常性を引き出す事を試みる。そのため、形態のシンボル性により外部に影響を与える〈分断－連続型〉や豊かな外部環境を用いる〈連続－分断型〉は適さない。
〈連続－連続型〉の特徴である自然を抽象化した非日常空間は、人工物に溢れた都市の中で空間の差異を強調する。そこで、〈連続－連続型〉の繋ぎの空間を設計する。
また、事例が最も少ない事から不足していた設計的特徴を理解、確認する為の実験的設計として活用する。

対象

非日常的ポテンシャルを有しながら日常に同化している空間として空地（ヴォイド）を対象とする。
人のスケールや生活に溢れた日常（街）の中で理論や理屈が建物と一緒にとり除かれた空間であり、非日常空間となる可能性を有している場所である。

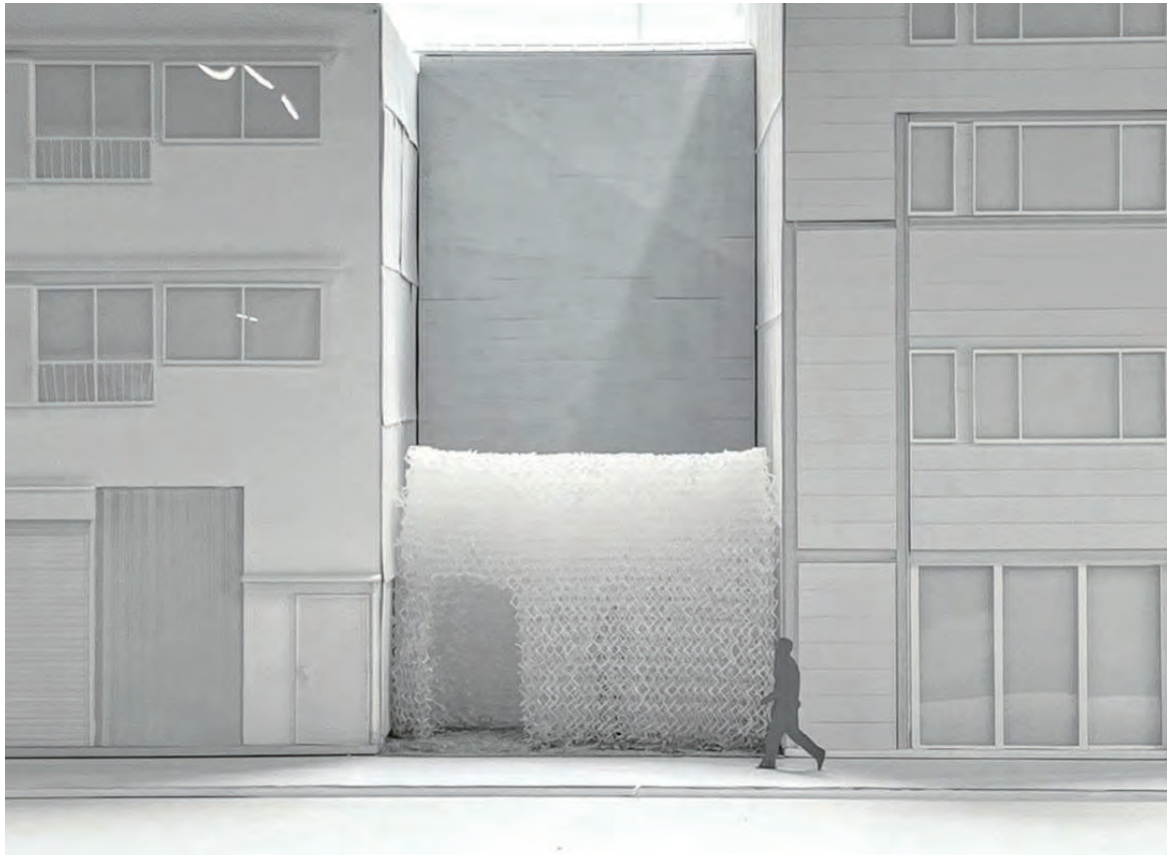
空地［akíti］



空地の中から空を見ると周りの建物できれいにトリミングされる。建物の余りとして見えていた空が、まるで主役と言わんばかりに主張してくる。
日常に埋もれているこの空を、非日常空間を構成する要素として強調する。

設計

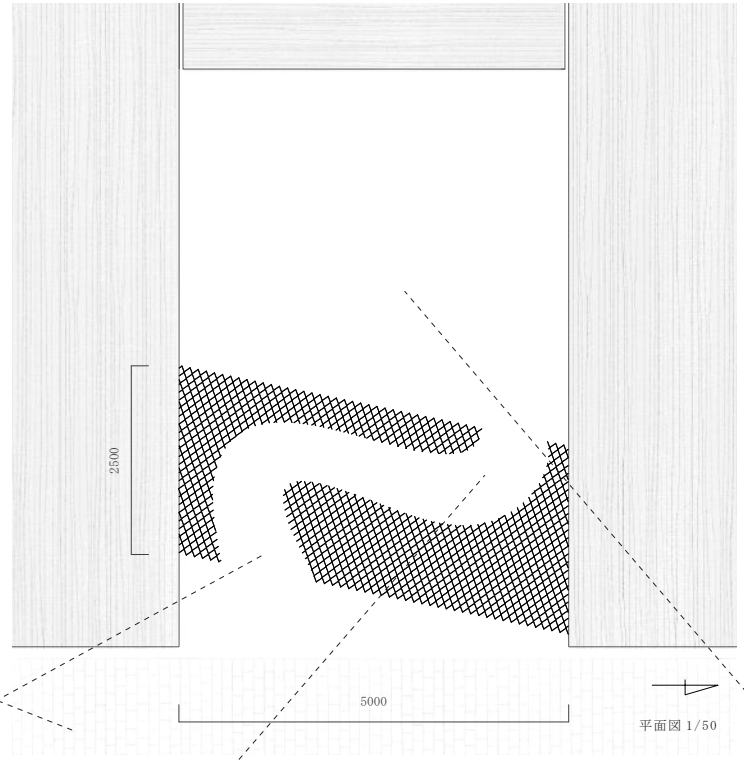
非日常のポテンシャルを有しながら日常に同化してしまっている空間に繋ぎの空間を設計することで、街中（日常）に非日常を生むことを試みる。



雲［kúmo］

離れると都市の輪郭と連続して、近づくと雲のような存在に気づき、抜けると空が見える。
物体的な都市（日常）の性質と非物体的な空（非日常）の性質を有して両者を繋ぐ。

ヴォリュームは離れて見ると建物のようなアウトラインが見えて街並みに連続する。



シークエンス［Sequence］

トリミングされた空を強調する空間への繋ぎの空間として雲に入るような体験を有する建築を設計する。
〈連続－連続型〉の連続性を生かして、日常に存在する雲や空を抽象化またはトリミングする事で都市（人工物）にまぎれている自然（空）を抽出した非日常空間となり、繋ぎの空間が連続性を認識させる。
この空の下で、人と自然との関係は根源的に認識されることだろう。

地上から雲を見ると物体としての存在感を感じる。しかし、近づいていくとモヤモヤとした形の定まらない非物体的な存在だと気が付く。
そんな、曖昧で不安定な存在。

この［雲］のヴォリュームは離れて見ると建物のようなアウトラインが見えて街並みに連続する。
近づいていくとヴォリュームの儚さに気が付き、奥に空間（空地）の存在を感じる。

物体的な都市（日常）の性質と非物体的な空（非日常）の性質を有して、両者を繋ぐ。

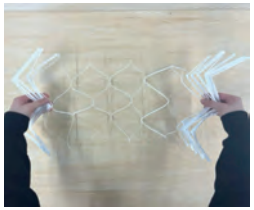
都市に［雲］を置く。霧散してしまいそうなほどに不安定なヴォリュームの向こうは〈非日常〉。

ヴォリュームの中を歩く。
角度や風に靡くことで密度が変化して、見え方が刻々と変わる。

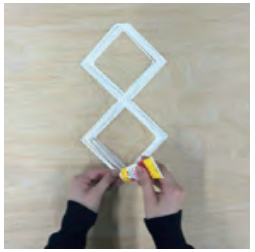
トリミングされた空を強調する囲まれた空間。［雲］が晴れたことで、つい空を見上げる。

制作［construction］

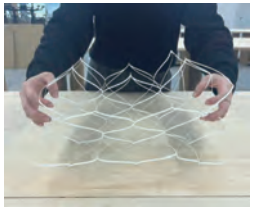
一枚のペラペラなプラスチックの板に切り込みを入れる。



横に引っ張り広げる。



二枚用意して接着剤でつなげる。

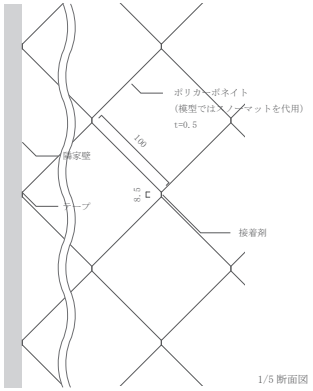


引っ張り広げる。

弾性を有する構造体となる。

形［form］

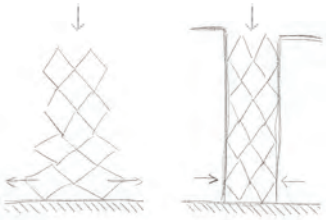
弾性を有するとても弱い構造が連なることで構成されている。風に靡いて粗密が変わるほどに弱く不安定な存在。

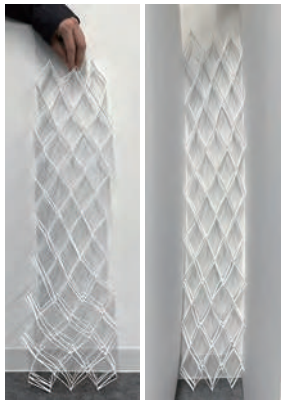


1/5 断面図

構造［structure］

自重や風圧力によって下部が押されて横に伸びてしまうほどに弱い。
このヴォリュームを空地に隣接する建物で挟むことで構造体が広がろうとする力に抵抗して自重を支える。
ヴォリューム単体では成り立たない。空地という場所と隣接する建物との関係の中で成立する構造である。



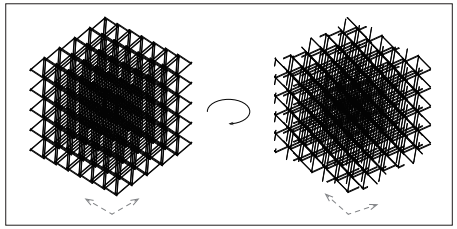


1/1

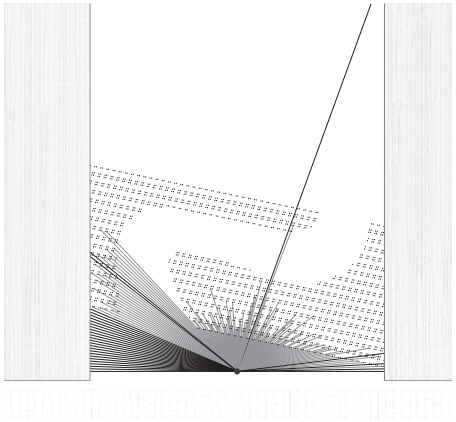
存在と影、実と虚、質量と空（カラ）。
ヴォリュームの軽さ故に、これらの境界が曖昧になる。
どこまでがヴォリュームでどこからが影なのか分からない存在感。
質量のある都市（日常）に対して、質量のない空地（非日常）。それらを質量の曖昧な存在で繋ぐ。

視線［seeing］

敷地に対してヴォリュームの幾何学が現れる軸を斜めになるように配置して幾何学を崩す。

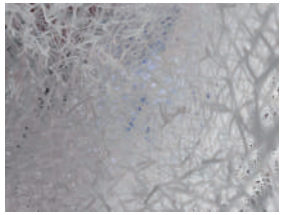


正面の視線は、幾何学が崩れることで線が無数に重なり非日常空間との分断を生む。
斜めの視線は、ある点でヴォリュームの幾何学軸と一致する。視覚の端の隙間から隣家の壁が見えることで奥の空間の存在に気が付く連続的な操作となる。

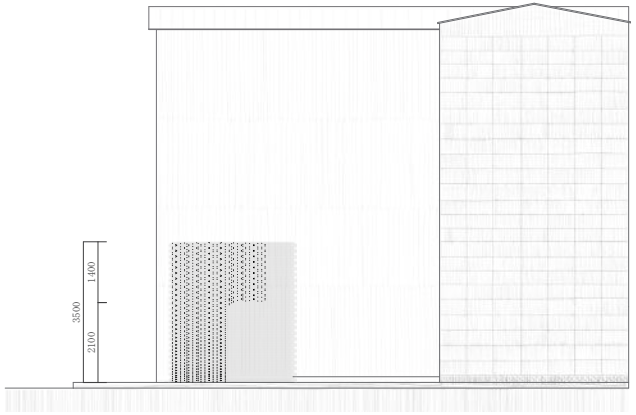


空気、光

手が届くような低い高さのアプローチとすることで、非日常空間の空を強調する垂直性を持つ空間との差異を生む。
ヴォリュームを積層することで空気、光的な連続性を保ちながら、非日常空間を構成する要素である空を覆むように隠す。



ヴォリュームの中から空を見る。



断面図 1/100